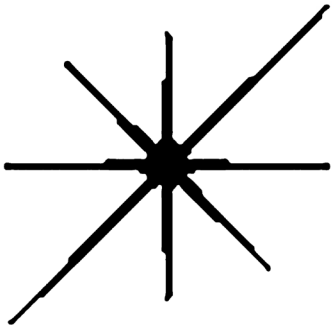
コメット通信 27

［’22 年 10 月号特別付録 1］



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

観音移動

野村喜和夫

「人生において」と詩人は静かに語り始めた，「これほどの不思議が私の身において生じうるとは，長い人生を生きてきた意味が多少はあったということになるのかもしれません」

詩人はここで，編集者の私の反応を待つように，少し間を置いた。都心のとあるホテルの，ロビーに接したカフェテリアの一隅である。静かで，がらんとしている。外では，午後の遅い陽射しを浴びて，糸杉の植え込みが路面に長い影を落としていた。何かご自分の詩について面白い話を聞かせてください。インタビューの趣旨はその程度のものだった。私はすでに録音装置をオンにしていたが，さらに身を少し乗り出して，興味を掻き立てられていることを示そうとした。何が語られるのだろう。「不思議」という言葉は，詩人から発せられただけに，それなりの説得力をもっているように思われたのである。

「2022 年 5 月 5 日，端午の節句の日に」と詩人は話をつづけた，「わが家に観音がやってきました」

「えっ？　カンノン？」

「ええ，観音さまの観音です，嘘ではありません」

どういうことだろう。私は担がれているのか。それとも，観音は何かの象徴だろうか。詩人だから，何かと言葉を象徴的に使うのではないか。

「正確に言えば観音像――小柄な女性の背丈ほどの，御影石でできた観音像ですけど」

「ああ」と私は納得し，少しがっかりもした。ともあれ，象徴ではなかった。「石でできた像ですね，それがやってきたと。つまり，どこからか野村さんのお家に運び込まれたわけですね。まあしかし，お寺でもないかぎり，それは十分に驚くべきことですよね」

「そうかもしれません。観音像が塀の向こうから，クレーンに吊り上げられてあらわれ，それからゆっくりと塀を越えて，玄関脇の松の木の隣の空きスペースに，さらにゆっくりと降り立ったのです」

「おお，クレーンで」と私は，再度煙に巻かれたような気になった。「シュールですよね。それが不思議ということですか。端午の節句と言えば，鯉のぼりですが」

「ええ。その向こうを張るように，観音が，たとえクレーンに吊られてにせよ，ぐわーんと空を飛ぶようにやってきた――というのなら，不思議も不思議，UFO 目撃に匹敵するでしょうけど」と詩人は，少し冗談を言って顔をゆるめた。やはり，多少は私を煙に巻こうという気持ちがあったのかもしれない。

「観音像は石です，どうしようもなく重い石です。それを道路から塀越しに庭に運び入れるには，クレーンを必要としたという，それまでのことです」

そして詩人はスマートフォンを取り出して，画面に観音像の写真を浮かび上がらせた。2 枚あり，1 枚はまさにクレーンに釣り上げられた観音像が塀の上に差し掛かった場面，もう 1 枚は，松の木の隣の，あらかじめ据えられたのだろう，どっしりした台座に観音像が揺るぎなく収まっている場面だった。

「ああ，でも立派ですねえ。庭ともしっくり合っている感じです」

「ありがとうございます。まあしかし，観音は，ある場所からある場所へ，石材業者のトラックに乗って運ばれてきただけです。不思議はそのあと生じたのですが，そのまえに，観音が空間を移動するに

至った顛末について語っておきましょう」
「それは興味深いですね」
「そうですか。そんな大した話ではないのですが」と詩人はことわって，いきなり生い立ちについて語り始めた。「私は 1951 年 10 月 20 日，埼玉県の入間市宮寺という純農村地帯に生まれました。戸籍上は次男なのですが，兄は生後すぐに死んでしまったので，実質的には長男として育てられました。生家は代々つづく村落上層の農家で，主に製茶業を営んでいました。入間市というのは，狭山茶の産地なのですね」
「はあ，聞いたことはあります」
「ところが，政治好きだった父は，家業も顧みず，市議会議員を振り出しに地方政治の道に乗り出し，市長選や県議会議員選挙など 10 回近くも選挙に出て，そのたびに，あまり外交的とはいえない母に多大な負担を強いたのです。昔の田舎では，議員をやるというのは，まあ旦那衆の道楽みたいなもので，そういう議員は井戸塀議員と呼ばれていました。百姓で政治献金も何もありませんから，先祖伝来の田畑を切り売りして選挙資金を作る。そのうちに家屋敷も荒廃し，井戸と塀だけが残る。それで井戸塀議員と呼ばれるわけですが，父にもそういうところがありました。しかし，家族はたまったものではありません。私もそんな父が嫌で，父のあとは継がず，文学の道を選んで詩人になりました」
「なるほど，そういうことだったのですね，エディプス的葛藤」
「まあそうかもしれません。今どき流行りませんけど」
「たしかに」と私は，ふと，昔読んだ中上健次の『枯木灘』を思い出した。「中上健次あたりですかね，エディプス的葛藤を文学の主題にした最後の作家は。村上春樹の『海辺のカフカ』になると，あれも一応オイディプス神話を下敷きにしていますが，もうエディプス的葛藤のパロディでしかない。入れ替わりに，母娘の相互依存とかがよく書かれるようになった。そんな印象があります」
「そういうことです」
「あ，ごめんなさい，話を折ったりして」
「全然」
　がらんとしていたロビーやカフェテラスには，夕刻が近いせいだろう，客がちらほらあらわれ，席を埋め始めていた。詩人は話をつづけた。
「で，詩人になろうとしたのと前後して，妻となる女性とも出会って結婚することになり，それを機に家を出て，東京に居を構えました。といっても，妻の援助で代々木公園近くのマンションに 8 年ほど住んだあと，いや，住まわせてもらったあと，世田谷区羽根木の妻の実家の敷地に家を建てて，いや，建ててもらって，今に至っています。つまりずっと居候しているようなものですが，詩人の細腕では，実利面で人生を切り開いていくなどという芸当は，到底できないことなのでした」
「わかります」
「ありがとうございます，と言っていいのかどうか」と詩人はうつむいて苦笑した。「それで，生家の方へは，ときどき父母の様子を見に帰る程度でした。父は県議会の副議長を任期いっぱい務めたあと，政治から足を洗い，悠々自適のリタイア生活に入りました。ところが，その頃から母の身体の具合が思わしくなくなり，よちよち歩きみたいな歩き方になって，認知症の症状も出るようになりました。すると，それまで亭主関白だった父は，うって変わったように母の面倒を見るようになりました」
「老老介護というやつですね」
「そうです。選挙でさんざん迷惑をかけた，その罪滅ぼしという意味もあったのでしょうね。結構それが生きがいになっている感じでした。そんな母が亡くなったのは, 2005 年 2 月 4 日, 立春の日でした。

享年 79。『なきがらの母に添い寝の余寒かな』。葬儀の日に私が作った駄句です。それからすぐに父は，齢 80 を超えていましたが，ある信じられないような行動に出ました。奇行といっていいでしょう。さっきも言ったように，選挙で女房に苦労をかけた罪滅ぼしにということだったのでしょう，どこかの石材業者に母の顔を模した御影石の観音像を作らせ，自宅庭の真ん中に据えつけたのです。母の四十九日に生家を訪れたとき，庭にその観音像を見つけて私は仰天しました。台座には名が刻まれていて，慧照院観音。慧照院というのは母の戒名の一部，いわゆる院号です。こんなことが許されるのか。これでは贖罪どころか，かえって罰当たりになりはしないか。あの，息子の私にはひたすら愚痴っぽく，信仰心のかけらもなかった母が，観音に昇格とは！　しかしそれ以上深く考えることもなく，そのときは苦笑してやり過ごしました。いや，やり過ごしつづけました」

「すごいですね。ご実家の庭に観音像が置かれたわけですね」

「ええ。これがそれです」

　詩人はまたスマートフォンを取り出した。覗き込むと，それなりに立派な母屋と土蔵と庭とが写っていて，その庭の真ん中のあたりに，後ろ向きに，つまり母屋に顔を向けた姿で観音像が立っている。

「でもまあ，考えてみれば」と詩人はつづけた，「生家のあたりは入間市宮寺というところですが，そこにさらに観音という字（あざ）がつくので，大昔にはじっさいに観音堂が建っていたのかもしれません。私の友人の詩人で，民俗や歴史に詳しい T 君もそう言っていました。それならば，そういうところに観音像が置かれることになっても，そんなに悪いことではないのではないか。そう思うことにしました」

「なるほど」

「その頃，観音について調べたことがあるのですが，『観音経』には，観音が人々を救うため，時や場所や相手に応じて三十三に姿を変えると説かれていますから，まあ私の母に化身したとしても，それほど間違いというわけでもない。それに，かつて観音像は，観音信仰特有の現世利益的祈願のためだけではなく，死者の冥福を祈って，つまり追善供養のために造られたこともあったと言いますから，慧照院観音というのも，罰当たりとばかりは言えないでしょう」

「なるほど」

「時は流れました。母の死の 8 年後に父も他界しました。享年 89。すでに言いましたように，私は長男であるにもかかわらず家を出てしまっていたので，生家には，父の生前から妹の 2 番目の息子，つまり私にとっての甥が父の養子になって住むようになり，やがて彼は結婚し，3 人も子供をもうけました。すると生家の母屋が住みにくいということで，ついに今年の 2 月，それを取り壊して新宅を建てることにしたと言い出したのです。母屋は築およそ 40 年。それまでは古い百姓家が建っていました。私が生まれ育ったのはその家屋の方です。父がそれを建て替えて，今の母屋にしたのでした。この写真の家です。専門の建築士に設計させたそれなりの邸宅で，月見台や坪庭などの遊びの空間もありました。ご覧のように，見た目には取り壊す必要なんか全然ありません。しかし，育ち盛りの子供を 3 人も抱えた甥一家にはなんとも住みづらいらしく，もっとコンパクトで使いやすい普通仕様の家を建てたいのだと言うのです。ついでに，例の観音像も邪魔だと。それを聞いて私は頭に血がのぼってしまい，衝動的に，『それなら観音像はうちで引き取る』と言ってしまったのでした。私にとって観音像は，いつの間にか，いわばかけがえのない母の形見となり，邪魔にされ廃棄されるぐらいなら，いっそ引き取ってわが家の庭に置き，朝な夕なに拝んでいたい。自分で言うのもなんですが，実は私は相当のマザコンなのです。母の生前は悪態ばかりついていて，実に親不孝者でしたが，死なれてみると，母恋しという思いがつのり，今度は自分が罪滅ぼしをする番だと」

「それで観音さまがやってきたわけですね」
「そうです。生家の近くの石材店に頼んで，撤去から設置までの費用の見積もりを出してもらったら，相当の金額になりましたが，マザコンを成就するためにはやむを得ません。こうして 5 月 5 日，入間市宮寺の生家から，世田谷区羽根木の今のわが家まで，30 キロぐらいでしょうか，観音さまの移動が行われたというわけです」
「それでさきほどの，クレーンに吊り上げられた観音像の光景となるわけですね」
「そうです。繰り返しますと，亡き母とほぼ等身大の観音像が，塀の向こうから，クレーンに吊り上げられてあらわれ，それからゆっくりと塀を越えて，玄関脇の松の木の隣の空きスペースに据えられた台座に，さらにゆっくりと降り立ったのです。玄関からその一部始終を見ていた私たち，私と妻は，思わず拍手してしまいました。それくらい，あり得ないことが起こったのでしょうから。とそのときです」
「とそのとき？」
「ええ。待てよと，突然ある事実に気づかされたのです」
「ほう」ようやく私は話の流れを掴んだ。「ここからが不思議なるものの開示ですね」
「そうです。クレーン，観音，クレーン，観音，と心のなかで唱えるうちに，そうだ似たような光景をむかし詩に書いたことがあるぞ，と思い出されてきたのです。たぶん即興的に書いた小品なので，書いたことすら忘れていたのですが，確かめるべく私は慌てて書斎に行き，自分の詩集を並べてある書棚から『難解な自転車』という詩集をひっぱり出し，該当する詩にたどり着きました。これがそれです」
　詩人はカバンから白い瀟洒な造本の詩集を取り出してテーブルに置き，付箋をつけられたページを開いて私に示した。そこには以下のような詩が印刷されてあった。

あるトポロジーな日に

けさパンを
ぱくつきながら
トポロジーとしてみるならば
という言葉がわけもなく浮かんで不思議だ
そういえば夢で
バオバブのふと幹に
政治家どもの首を高く吊るせと叫んだ
トポロジーとしてみるならば
男も女もあおむしも
同じドーナツ
ありがとう私は電車に乗ると
さまざまな人が突っ立ちしかめ面や
まれに笑いのさざなみを咲かせるが大丈夫
ちがいはない個性なんていう
ちがいはないって電車を降り
別れた女の住む町を歩く

偶然にもそこで働くことになったのだ
トポロジーな
もふもふした雲からさす鈍い陽ざしが砂礫にあたって
砂礫のごとき人生かな
むかしそんなふうに嘆いた詩人も
いたな頭ヲ挙ゲヨ砂礫のうえに
クレーンがある
別れた女もいまごろは脳みそごとずるっと
午睡のトポロジーに脱皮している
だろうか思い出の
母よあなたに似た
丘のうえの大きな大きな
できたての白いふっくりとした観音さまを
クレーンがひっかけ
吊り上げようとしている

「おお」と私も驚嘆の声を上げた。「たしかにありますね, クレーンに吊り上げられた観音。しかも『母よあなたに似た』とある」
「でしょ。この詩集には初出一覧がなく，いま初出紙誌は確かめられないのですが，詩集の刊行は2011年ですから，この『あるトポロジーな日に』は，遅くとも2011年には書かれていたということになります。今年は2022年ですから, つまり11年前です。これではまるでアンドレ・ブルトンの『ひまわりの夜』ではないか。私は唖然とし，それから喜びに打ち震えました」
「申し訳ありません，その『ひまわりの夜』というのは？　どこかで読んだことがあるような気もするのですが，なにぶん，フランス文学に疎いものですから」
「あ，そうですよね，ある程度シュルレアリスムに通じていないと，いきなり『ひまわりの夜』と言われても，なんのことだかわかりませんよね」
「申し訳ありません」
「いいえ，とんでもない。説明しましょう」と詩人は，カバンから今度は文庫本を取り出して，『難解な自転車』の隣に置いた。アンドレ・ブルトン，『狂気の愛』，と読める。
「この本の中に書かれているんですけどね，シュルレアリスムを主導した詩人アンドレ・ブルトンは，あるとき，夜のパリで，のちに2番目の妻となる女性と偶然に出会い，恋愛関係に入るのですが，それとそっくりの出会いを, すでに10年も前に自作の詩『ひまわり』に書いていたことに気づくのです。時系列に沿って言えば，ブルトンはまず，『ひまわり』という自動記述的な詩を書きます。パリの夜を彷徨っていたら, 謎の美しい女と出会ったというような内容の詩で, 1923年に刊行された『地の光』という詩集に収められましたが，ブルトン自身はあまり気に入らなかったのか，書いたことすら長らく忘れかけていました。まあ言ってみれば，私の『あるトポロジーな日に』と同じですね。ところが，それから11年後の1934年5月末，彼は『許しがたいほど美しい女』，のちに2番目の妻となるジャクリーヌ・ランバと偶然に出会って夜のパリを散歩するのですが，そのときの状況が，詩篇『ひまわり』に書かれた内容と驚くほど一致していたというのです。言い換えれば，詩篇『ひまわり』は，それから11年後の現実をその細部にいたるまでいちいち予告ないし予言していたということになりま

す。おいおい，オカルトかよ，と言いたくもなりますが，まさに『超現実』ですよね。ブルトンはそれをいたって真面目に，『客観的偶然』と名づけました」
「客観的偶然，ですか」鸚鵡返しに私はその言葉を繰り返し，どういう意味なのか，しばし考えてみた。「ふつう偶然の一致といえば私がそう判断するわけで，つまり主体が関与するわけですよね」
「ええ」
「ところが，そうではなく，全く主体が関与しないような，純粋な偶然というものがある，それは必然と言っても同じこと，みたいな？」
「そうかもしれません。ブルトンは，マルクス・エンゲルスのあのエンゲルスの著作に同じ『客観的偶然』という言葉があるとして，それと無理やり紐づけようとしたのですが，つまり主観的にはたんなる偶然の一致かもしれない出来事が，客観的には，ちょうどマルクス・エンゲルスの史的唯物論のように，何かしら見えざる力によって推進されているというような」
「でも，ただの偶然の一致にしておいた方が，出来事の自由度を担保できるような気もするのですが」
「私も以前はそう思っていました。でも今度の観音像の移動に立ち会って以来，どうも微妙に自分の世界観が変わってしまったようにも思えるのです」
「オカルトの方へ？」つい私は口を滑らせてしまった。しかし別に詩人をからかおうとしたわけではない。
「どのようにでも言ってください」詩人はそう言われることを予想していたのだろう，気にも止めないというふうに応じた。
「いや，やめましょう」と私から軌道修正を申し出た。「世界は謎や神秘があった方が面白いですから」
「ありがとうございます」そう言ったきり，詩人は沈黙した。ロビーやカフェテリアのざわめきがこれまでよりも音量を上げて耳に届いた。外では，いつの間にか夕闇が迫っていた。糸杉の影は失われ，ビルの向こうに夕焼けの切れ端が見えた。これでインタビューを切り上げてもいいが，もうひとつオチになるような展開がほしい。
「ところで，この詩集タイトルの『難解な自転車』というのは？　自転車が難解とは，面白いタイトルですね」
「そうか」と詩人は，話の繋ぎを掴んだというように膝を叩いた。「これも，ある意味シュルレアリスムに関係あるといえばありますね。よかった，ご質問いただいて。『難解な自転車』は表題作ですけど，ある日，家のまえの門扉に，自転車が乗っかっていたんです。実話です。たぶん誰かのいたずら，嫌がらせだと思ったのですが，それにしても気味が悪い。これではまるで，マルセル・デュシャンの『泉』ではないか」
「ああ，それならわかります。レディメイドの男性用便器をそのまま『泉』と題して美術館に展示した。デペイズマンというやつですね」
「そうです。ある物品を本来の用途から外れたところに置く。するとオブジェになる。ロートレアモンの例の有名な『手術台の上のミシンと蝙蝠傘の偶然の出会いのように美しい』という，あれですね。シュルレアリスムの金科玉条でもありました。ミシンを裁縫工場から手術台に移すように，トイレにあるべき便器を外して美術館に運び入れ，『泉』と題して展示する。すると俄然，オブジェとなるわけです。この自転車も同じじゃないか。誰の所有とも知れぬ自転車が，意味もなく目的もなく門扉の上に乗っかっている。いや違う，オブジェにもならない，センセーションも巻き起こさない，ただただ無意味で気味悪いだけだ。なんなんだこの自転車は」
「それで『難解な自転車』，というわけですね」

「そうです」
「で，そのあとどうなったんですか，その自転車は」
「それがまた変なんです。翌日になっても門扉に乗っかったままなので，撤去してもらおうと警察に通報したんですが，やってきたおまわりさんは，管轄外だと言って 1 ミリたりとも動かさない。私たち，私と妻は唖然とし，かつまた，途方にくれてしまいました。ところが，そのまた翌日，その自転車が，出現したときと同じように，忽然と消えているではありませんか」
「どこまでも難解な自転車ですね」
「ええ，どこまでも。そしていつまでも謎として私の頭に残ってしまう。癪ですから，表題作の末尾では，その自転車に向かって命令してやりました」
　詩人は笑いながらそう言って，ふたたび『難解な自転車』を手に取り，ぱらぱらとめくりながら当該のページを探し，見つかるとそこを開いてテーブルに戻した。夕闇の迫ったカフェテラスの，間接照明だけのほの暗いテーブルの上に，次のような文字列が浮かび上がった。

　　誰か　髪の　長い
　　すらりとした　肢体の
　　誰かに　またがって　もらって　颯爽と
　　私の　頭の　どこか　へりから
　　立ち去れ　難解な
　　自転車よ

　なるほど，命令文だ。文節ごとに区切って一字空けのスペースを作っていく書き方が面白い。たしか中原中也も同じ書き方をしていなかったか。しかし私はそのことは質問せずに，
「この『誰か』は『少女』でもよかったですかね」と思わず口を滑らせてしまった。詩人に推敲を促しているような言いぶりに，我ながらやばいと思っていると，
「ああ，そうですね，『少女』もいいなあ」と詩人は，どこまで本心かは知らないが，いたって柔軟に応じた。そこで，
「でも，面白いですねえ」と私の方から，慌てて話題を逸らした。「自転車も観音像も，詩人の家に移動してきたということでは同じですが，その意味合いは全然違いますよね。観音像はデペイズマンではなくて，むしろその逆，一番ふさわしい場所に落ち着いたと言えるんじゃないでしょうか。御母堂にとっては，愛する息子のもとに移動してきたんですから」
「ありがとうございます」
「いや，移動ということでも違いがある。観音は空間だけではなく，時間のなかをも移動してきたわけですね。むかしのこの『トポロジーな日』の詩的出来事から，十数年後の，いまの詩人の家の玄関脇まで」
「そういうことになりますね。現実世界よりもひとまわり大きい時空，世界の無意識ともいうべき時空のなかを」
「世界の無意識，ですか」と私は，鸚鵡返しに応じた。夕焼けの切れ端は，今やすっかり暗灰色にくすんでしまっている。
　詩人は詩集を閉じ，目を閉じた。その瞼には，彼の亡き母と等身大の御影石の観音像が，青黒い夕闇のなかにうっすらと浮かび上がっているにちがいない。祈っているのだ，いま詩人は。私はと言え

ば，つられて目を閉じたが，薄く像を結ぶにすぎない観音像の肩の上に，件の自転車が引っかかっているのである。その自転車を，どうしても撤去することができないのである。

執筆者について――

野村喜和夫（のむらきわお）　1951 年生まれ。詩人，批評家。小社刊行の主な詩集には，『風の配分』（1999 年，高見順賞），『よろこべ午後も脳だ』（2016 年），批評には，『オルフェウス的主題』（2008 年），『パラタクシス詩学』（共著，2021 年），『シュルレアリスムへの旅』（2022 年）などがある。